

相模三浦一族の起源

奥 富 敬 之

荒野の一騎討ち

村岡五郎良文

平安時代中期のある日の巳の刻（午前十時）ばかりの頃、東国の原野で二つの軍勢が相對峙していた。

『今昔物語集』には、双方の軍勢は「各々五六百人許^{おののばかり}」であったと記されている。しかし、のち／＼のことを考えると、この人数は多すぎる。その実数は、ともに数十騎前後だったのではないだろうか。

一方は嵯峨源氏の箕田源次充^{みつぐ}の手勢。対するは桓武平氏の村岡五郎良文の麾下である。ともに首將を中心に、左右に馬首をそろえている。

すでに戦端の火蓋が今にも切られようという寸前の殺氣が流れていたが、両軍の首將相互の間には、とくに意趣意恨があるわけではなかった。それどころか、いままでほとんど付き合えずらもなかった。

二人とも剛胆で、思慮にも富んでいた。その上、この時期の東国の武士たちの間でも、拔群の弓馬の達者でもあった。しかし、これがよくなかったのである。

「いずれが、より秀れたる武者なるぞ」

いずれ劣らぬ武勇自慢の東国の武士たちの間では、なにごとに付けても

二人は引き合いに出されて比較され、種々の噂のもとになっていた。双方の郎等たちがともにおのが主の武勇を誇ったことは、無責任な他人の優劣論争を当の二人の間に対立心と敵愾心とを煽ることになった。

やがて……

「日を契りて、然る可き広き野に出でて、雌雄の程を眼前に決す可し」

どちらからともなく、このような果たし状が交換され、ついにその当日が来たのである。

相對峙する両軍の間は、ほぼ二町ほどの幅の無人地帯になっていた。さきほどまで樹木の間で囀っていた小鳥たちも、あたりに漂う殺氣に打たれたのか、もはや声を挙げようとしめない。死の静寂が支配するのみである。相對する両軍の武者輩^{ばい}は、ともに前面に楯を突き並べて睨み合うばかりである。

戦機はすでに熟していた。双方の軍勢の間には、しだいにじり／＼とした氣分が昂まってきていた。

と、そのとき、まるで申し合わせたかのように、両軍の間から一騎づつの騎馬武者が、自軍の列を割って現われた。ともに十代後半かと思える若武者である。騎馬のまま首將の下知を受けると、ともに静々と馬を進めて敵陣に向かった。

戦使による戦書の交換である。

「いざ、戦かわん」

開戦の決意を記した戦書を敵将の手に渡し、馬首を転じて自陣に戻る。これが戦使の交換である。東国武士社会特有の風習だった。

敵からの戦書を受け取ったあとは、双方ともに、いつでも矢石を発して攻撃をかけてもよいことになっている。だから、戦書を届けたあと自軍に帰りつつある戦使は、いつ何時、背後から射られるかも知れない。

しかし同時に、自陣に戻りつつある戦使を、背後から襲うとは卑怯であるともされている。だから通常は、自陣に戻りつつある敵方の戦使にさまざまな声をかけてこれを振り向かせ、振り向いた途端の顔面に矢を放つた

りすることもある。あまりきれいなやりかたではない。しかし、いま戦場になろうとしているこの場では、双方ともに敵の戦書を受け取ったあと、自陣に戻って行く敵の戦使に声をかけるものは一人もない。ともに、きれいに戦かおうという心底が現われている。

一方、両軍一騎ずつの戦使の振舞いも立派であった。馬も速めず、見返しもせず、首も竦めず、肩を丸めてもない。いつ背後から矢が飛んでくるかも知れぬというのに、二騎とも昂然と首を挙げて、ただ静々と自軍の方に戻って行くのである。その態度は十代の若武者とは思えぬ落ち着き振りであり、天晴れ剛胆な武者振りであった。

ともに坂東の兵の道に見事なまでに叶った若武者の名は、いずれも今に伝わってはいない。両軍ともに寂として静まりかえっていたのも、この二騎の振舞いに感じ入っていたからかも知れない。

「勇将の下に弱卒なし」という言葉がある。ともにきわめて床し気な武者を麾下に擁している箕田充、村岡良文の人となりは、すでにしてそこはかとなく推量された。

戦使の交換も無事に済んだので、ともに鯨波を挙げて突撃しようとした瞬間である。良文の陣中から、また一騎の軍使が現われた。小走りに馬を奔らせて充の面前に馳せ寄せると、見事なまでに巧みに馬を馱して輪乗りをしつつ叫んだ。

「我が主の口上に候。今日の合戦は、おの／＼軍をもって射組ませば、その興侍らず。たゞ君と我れとが、おの／＼の手並みを知らんと也。されば、方々の軍を射組ましめずして、たゞ我等両名のみ馬を走らせ合て、手の限り射んと思うが如何思すや」

首将同志の一騎討ちで、雌雄を決しようではないかというのである。

「我れも、しか思いし也。されば、速やかに罷り出でむんず」

答えた充は、すぐに掻き並べた楯の外へ出ると、たゞ一騎で自軍の前に立ち、雁股の矢を弓につがえた。

これを遠望した良文も、背後を振り返って、

「たゞ我一人、手の限り射組まんとする也。されば、其方たちは、たゞ任せて見よ。さて我れ射落されなば、意趣を含むことなく、我が身を取りて葬むる可き也」

と麾下に下知すると、これもたゞ一騎で軍中から躍り出た。

ともに雁股の矢をつがえて馬を疾駆させ、すれちがいざまに矢を放つのである。最初は、ともに慎重にかまえて相手に先に射させようとしたので、結果的に二人の馬が凄まじい勢いですれちがっただけであった。

ともに馳せすぎたところで馬を取って返すと、またも激しい勢いで馳せ寄ったが、今度は良文が矢をきって放した。

その矢は、真一文字に飛んで、馬上の充の胸板に向かった。あわやという瞬間、充が落馬せんばかりに体を横に倒したので、矢は充の太刀の股寄にあたって、カチーンッという金属音とともにわきに跳んだ。

つぎにすれちがったときに矢を発したのは、充であった。これも良文の胸板に向かつて飛んだが、突き刺さる寸前に良文が身をかわしたので、これも良文の太刀の腰当てをかすめただけであった。

四度目に馬を馳せ合おうとしたときである。良文が充に声をかけた。

「互いに射るところの矢、みな外るゝものにあらず。悉くもつとも中を射る矢也。しかれば、ともに手並みの程は見つ。手練の程、冴えたり。しかるに我等、昔より伝わる敵にあらず。今はかくて止みなん。たゞ腕の程を挑むばかり也。互いにあなたがちに殺さんと思う可きにあらず」これに対して、充も破顔一笑して答えた。

「我れも、しか思う也。まことに互いに手並みの程は見つ。されば戦は止みなん、よきこと也。さは引きて帰りなん」

こうして、両軍ともに勢を引いて帰って行った。そのうち、良文と充は露へだてる心もない無二の親友になったという。

この挿話には、かなり誇張が多い。細微な点まで見ると、あまりにも美化されているようである。しかし、のち兵の道に叶った典型的な東国武士と仰がれるにいたった二人のひととなりは、そこはかとなく伝わってくるようである。

いづれにしても、二人ともにいづれ劣らぬ爽やかな武士であった。箕田源次充は、のちの渡辺党の祖であり、子孫には鬼退治で有名な渡辺綱などが出る。いづれも一字名前でも世に知られている。

そして、村岡五郎良文は、本篇の主人公、相模三浦党の祖である。子孫には千葉、上総、土肥、秩父、大庭、梶原、俣野、長尾等々があり、いわゆる坂東八平氏共通の祖と仰がれることになる。

このように二人の子孫がのちに大きく繁延したのに反して、二人の所領の所在は、ともに明確ではない。ともに武蔵国内説と相模国内説がある。

武蔵説をとると、箕田源次充の所領箕田郷は、現在の鴻巣市箕田に比定される。同地の箕田八幡は、充の子渡辺綱を祀ったものという所伝を持つ。

武蔵説には、港区三田がそうだという説もある。これによると、現在同地にあるオーストラリア大使館がほぼ充の館があった所で、同大使館内に残る古井戸は渡辺綱の産湯の水を汲んだものであると伝えられている。

これに対する村岡五郎良文の所領村岡は、中世の熊谷郷内の地であったとされ、現在の熊谷市村岡の地に比定される。同地には、村岡館址と伝えられる遺跡がある。

鴻巣市箕田と熊谷市村岡とは近接しているので、あるいはこの両地かとも思われるが、箕田郷・村岡ともに相模国内にあったという説もある。

これによると、川崎市多摩区三田が箕田郷で、藤沢市村岡が村岡の地だったという。藤沢市村岡東三丁目には村岡城跡と伝えられる遺跡もあり、石碑も建てられている。

しかし、この相模説をとると、箕田郷と村岡の地とがやや離れてしまい、前述した二人の一騎討ちの伝承が成立し難くなってしまふ。しかし反面では、村岡良文を共通の祖とする坂東八平氏のうち、三浦、土肥、大庭、梶原、俣野、長尾などの諸氏の苗字の地の分布とよく合致するということもある。とくに、大庭氏の藤沢市大庭、梶原氏の鎌倉市梶原、長尾・俣野両氏の横浜市戸塚区長尾・俣野などは、藤沢市村岡とは近い。

このように、武蔵説、相模説のいづれにも一長一短があって、にわかに断定することはできない。しかし、これに第三の説が付け加わる。おもに村岡良文の本領についてである。

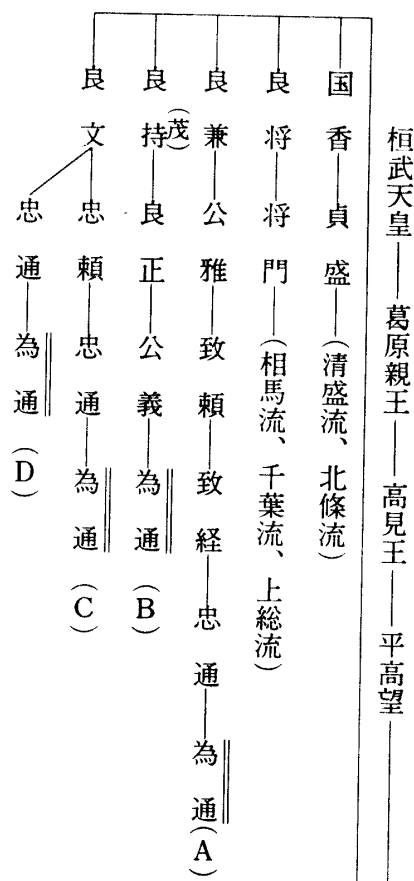
彼の本領の村岡郷は、本来は武蔵国大里郡村岡（熊谷市村岡）であったが、のち相模国鎌倉郡村岡郷（藤沢市村岡）に移ったのだというのである。

る。こう考えれば、前述した伝承がすべて生きてくることになるので、現在、この説を支持するものは多い。

しかし、良文の本領の移転の順序が、この逆だったのではないかとするムキがあることも、ここで付言しておくべきであろう。

なお、村岡五郎良文は三浦氏を含む坂東八平氏の共通の祖であった。しかし、このことにも異論がないわけではない。

第二次世界大戦中に『三浦党と鎌倉武士道』を上梓された高橋恭一氏は、三浦氏の祖系に関する諸説を、ほぼ四種に大別された。



A 「満昌寺より差上候御系図」、「三浦古尋録」、「本朝武家評林大系図」

B 「尊卑分脈」

C 「統群書類従」、「桓武平氏系図」

D 「寛永諸家系図伝」、「諸家系図纂」、「系図綜覧」、「三浦系図」、「正木家譜」、「満昌寺現蔵三浦系図」

このように諸説は粉々としているが、三浦氏が桓武平氏の一庶流であるとする点で共通している。前後の様子から見ると、良文流とするのが、ほ

ぼ妥当するのではないだろうか。いずれにしても、為通より以前の代は、三浦一族にとっての神話的な時期だったと見ることでしよう。

上意討ち

村岡次郎忠通

もと／＼東国の原野は、狩猟民族である蝦夷の支配地であった。当然、古来には農耕の鍬が入った所は少ない。

奈良時代の前後の頃、中央政府は数度にわたって、この地に遠征軍を送った。その結果、ようやく蝦夷の勢力は北方に追いやられ、東国は新附の辺境地帯になったが、武力がすべてを決する社会であることにはかわりなかった。

中央に平安京を樹立した桓武天皇の末流である村岡良文の兄たちは、いずれも鎮守府將軍などの任を拝して、その地に赴任してきたのである。良文自身も鎮守府將軍を拝命したことがあると、諸系図の一本は伝えている。

藤原氏北家が要職を独占していた京都を去って東国に赴任した彼らは、この地に新天地を伐り開くべく、東国の各地に鍬を入れた。土着したのである。こうして、ようやく東国の地にも、開拓の手が及んできたのである。この時代、東国はいわば無主の地であった。開墾開発は困難をきわめたが、伐り開いた耕地はすべて彼らのものであった。そのため、開発は非常な速度で進展した。

この時期の東国は、まさに実力の社会であった。開墾も実力のうちならば、武力も実力のひとつであった。武力のないものは、折角伐り開いた土地を、押領や越境の手から守って行くことができなかった。こうして、農

事の隙を縫って、彼らは武事に励んだ。

箕田充と村岡良文の二人が原野で雌雄を決しようとしたのも、この時期の東国では、ありふれた事件のひとつにすぎなかったかも知れない。

いずれも小競合こせうあいでしかなかった。闘う兵力も、いずれも数十騎、あるいは数騎にすぎなかった。

そのような小競合ではあったが、それが日常茶飯事のように頻発すると、そこに新しい秩序が現われてくる。しだいに同盟とか結集というようなことが行われるようになったのである。

このような武士が武士団であり、当時の言葉では党であった。武蔵七党とか坂東八平氏などというのは、数多い武士団のうちのとくに大きなものであった。

武士団の成員のうちには、相互に対等の関係に立つものもあった。しかし、棟梁と呼ばれたものの指揮下に、主従関係をもって組織された武士団のほうがやはり多かった。

十一世紀に入った頃、東国武士の棟梁としてめき／＼と擡頭してきたのは、清和天皇の末流と称された源氏一族であった。

村岡良文の兄良将の子平将門が天慶の乱を起こしたとき、これを鎮定するの功があったのが、臣籍降下して清和源氏の初代となった源経基であった。その子多田満仲は藤原氏摂関家の爪牙として安和ノ変などに活躍し、藤原氏が花山天皇を退位させたときにも事件の蔭で働いていた。そして、その長子源頼光は、三代の天皇の外戚として権力を振るった御堂関白藤原道長に近侍する侍になっていた。

源頼光は、その道長の権力と権威をおのが背景として、諸国の武士に対した。当然、諸国、とくに東国の武士は翕然きゆうぜんとして頼光の麾下に馳せ参じ、これを武家の棟梁に推戴した。

頼光の麾下に馳せ参じた数多くの東国武士のなかに、箕田充の子の渡辺綱や村岡良文の子の次郎忠通もあった。この時期の東国の住人として、源家に仕えぬわけには行かなかったというばかりではない。頼光自身に東国の武士を惹き付けるものが、多分にあったのである。

なお、大江山の鬼退治の伝説で有名な頼光には、頼光の四天王よっぺんおうとして知られる抜群の勇猛を誇る家人が四人いた。その第一が渡辺綱。第二の坂田金時に次ぐ第三が、村岡次郎忠通であった。ちなみに第四は卜部季武である。

この四人が、勇猛をもって喧伝された数多い頼光の家人たちのなかでも、とくに武勇に秀れたものとして数え挙げられていたのである。

この村岡次郎忠通は、しば／＼平貞通の名で史上に現われる。これから約一世紀ほどのち、藤原摂関家に同名の忠通なる人物が出たので、世人がこれを憚って村岡忠通を平貞通と呼んだのである。

だから、『今昔物語集』などに平貞通の名で登場するのは、その実、村岡忠通のことにほかならない。しかし、世人がこのように改称したのは、忠通本人の死後のことであった。当然のことながら、忠通自身は、死後に自分の名が呼び改められようとは、つゆ知る由もなかったであろう。

いずれにしても、源頼光の家人となって上洛した村岡次郎忠通は、数多い同輩のなかでも、とくに屈強のものとして知られるようになっていたのである。

この時代、貴人の家人になった武士は、侍さむらいと呼ばれた。貴人の側近に侍るもの、あるいは候さぶらうらうもの、の意味である。頼光の侍になった忠通が頼光邸の侍所に詰める日々は、こうして続いた。

ちなみに、頼光の京の邸は、左京の一條一坊の地にあった。現在の上京区小川殿町の、一條源氏邸址いちじょうげんしぢしがそれらしい。この時期、村岡忠通は毎日

々々に参観していたのである。

忠通が頼光邸の侍所に詰めていたある日、その頼光邸で酒宴が開かれたことがある。多くの客人が寄り集まっていたなかに、頼光の弟の頼信もまじっていた。頼光に二十年も遅れて生まれた頼信は、すでに三十代後半にさしかかって長者の風を備えてきた頼光とくらべると、ひどく若々しく血気旺んに見えた。

その頼信が高音で忠通に呼びかけたのは、忠通が瓶子びんしを持って現われたときである。

「やよ忠通、よく承まれ。駿河国の住人某なるもの、頼信がために無礼を致すことあり。されば、そのしゃっ首、取りて持つてこよ」

多くの耳目のある満座のなかで、よく透った声音で某の討手を命じたのである。いささか奇異な振舞いとも、忠通には思われるものであった。

「我れは頼光の殿には侍りてあり。なれど弟御の頼信の殿を主と参り仕えたることなし。かようのことは、おのれの侍にこそ云わめ。我れに下知せらるゝようやある。また、いかばかりに人の多かるうち、かゝることを声高に云わるゝ可きにあらず。おのづから秘かに呼びて、忍びやかにこそ下知せらるゝ可し」

こう心中に思った忠通は、はきとした領状もしなかったが、それでもその場はそれで済んだ。

忠通は、自分の主でもない頼信が自分に下知したことを、小面憎く感じたのである。また、満座の席で討手を命じたら、相手にそのことが洩れて無用の警戒をされてしまうことになる。

だから、頼信の振舞いはあまりにも軽忽にすぎると思ったのである。だから、頼信の下知に従うつもりはなかった。無視することにきめて、そのまま日を送っていたのであるが、そのうち、いつとはなしに、そんなこと

があったということも忘れてしまった。

ところが、それから数カ月ほどたったときのことである。所用があって東国に下った忠通は、途中の駿河国で、頼信が討ち取れと命じた当の本人に行きあったのである。

忠通自身は、すでにそんな下知を受けたことも忘れてしまっていた。しかし、某のほうはそうではなかった。人伝てに頼信が自分への討手を忠通に下知したことを聞き知っていて、警戒を怠らなかったのである。

その忠通に、今、出合ったのである。ますます緊張したのも当然のことであつた。全身に警戒の態度を露わにしつつ、

「しかく、と、承わり給いしが……」と、忠通に尋ねてきたのである。

尋ねられて、忠通のほうも思いだした。

「さることは、確かにありき。されど、我れは頼信の殿に下知せらるゝ身には侍らず。また、あまりに軽忽の御下知に候へば、さることなすべしとも思わず。たゞ忘れたり」

と、包まず忠通は害意のない旨を伝えた。

これを聞いて安心したのが某である。安心のあまりに、

「いとよく思おもひ召したり。かりに我れを討たんと思さるるとも、我れも弓矢取る身なり。むざとは討たれまじきものを」

と、ついつい傲慢なことを口走ってしまったのである。

これを小癪せきなと感じたのが、忠通である。討てるものなら、討ってみよと云わんとばかりの某の言葉に、

「なにをっ」

という気持ちの昂ぶりすら起こったのである。

やにわに弓に矢をつがえて、

「我れ、今、心変わりせり。討たじと思いたりしが、今、汝を討たんとはするぞ。矢をばつがえよ。太刀をば抜け」

と叫んで、某の馬前に立ち塞がった。

某が自分の失言に気付いたかどうか判らない。しかし、これも、

「さることにてあらんと思いつるわ」

と喚き返すや、すぐに馬首を廻らそうとしたが、その瞬間、忠通の放った矢は、あやまたず某の首筋を射抜いていた。

やがて所用をおえて上洛した忠通は、討ち取った某の首を頼信に献じた。喜んだ頼信は、鞍置きの名馬を忠通に与えて、これを篤く賞したという。

のち、このことを他に語った忠通は、

「平かに行き過ぎ可かりけるを、由なき雑言を一言吐きつるばかりに、

某は生命を落しぬ。さばかりの人のこと、河内殿(頼信)の安からず思しけることこそ由々しけれ。まことに頼信の殿は忝かたじけなき感ある人也」

と感想を洩らしている。

こうして、頼光一人だけを主と定めていた忠通も、頼信の思慮と武威に感嘆して、その郎党となって仕えるようになったのである。

ちなみにややのち、一ノ谷、屋島と転戦した義経が、兄頼朝から貸し与えられた兵力をおのが郎党に対するかのように遇して、御家人たちから疎まれたことがある。本来の東国武士には、主君と恃む個人はあっても、主家という意識はなかったのである。兄頼光の郎党であった忠通を自分に心服させてしまった頼信は、のちの義経に比して、いかに偉大であったかということである。

この頼信の系統が、のち、頼朝などに続く源氏の嫡流になって行くのである。忠通の末流である三浦党がその頼朝の御家人として活躍したことを

思うと、忠通が頼信の下知に従って上意討ちを果たしたことは重大である。清和源氏の嫡流と三浦一族との間に結ばれた主従関係は、この事件を契機として譜代相伝のものに転化したのである。

三浦半島への土着

三浦平大夫為通

本来的に清和源氏の嫡流たるべき頼光の系統は、摂津多田荘を根拠地として畿内に定住して、東国との関係を断ってしまった。いわゆる「多田源氏」、あるいは「摂津源氏」というのがこれである。

かわって東国に勢力を扶植し続けたのは、頼光の三弟頼信の系統であった。頼信が河内守だったので、「河内源氏」とも呼ばれる。

長元四年（一〇三一）、房総で起こった平忠常の乱を頼信が鎮定したのは、河内源氏の東国進出の一例であった。このとき、史料の徴証はないが、村岡忠通が頼信の麾下にあったであろうことは疑いない。

なお、長元の乱の首魁平忠常は、村岡忠通の弟忠頼の子、つまり忠通の甥であった。当然、忠通が頼信の麾下にあったとしても、後世に残るような武功を樹てるわけには行かなかったのである。

その後、河内源氏の嫡流は、頼信からその子頼義へと代替りして行った。同様に、村岡氏の惣領も、忠通から嫡子平大夫為通へとかわっていた。しかし、主従関係は代を累かさねて続いていた。

この頃、頼義の弓射の妙に感した平直方が娘を頼義に娶めよわせるとともに、相模鎌倉の館を頼義に与えている。現代の寿福寺の地がそれだと思われる。源氏と鎌倉との関係は、こうして始まったのである。

ちなみに、この時代における館というのは、単なる建物だけのことは

ない。附近の田地や山林などをも含む一個の所領をも意味していたのである。だから、頼義が鎌倉に館を持ったということは、相模鎌倉（とその付近一帯の地）が、源氏の所領になったということでもあったのである。

その直後に起こったのが陸奥安倍氏の乱、いわゆる前九年の役であった。

これは、陸奥守であった上に鎮守府將軍を兼ねた頼義が、東国におけるおのが覇権をさらに陸奥国にまで及ぼそうと図って、陸奥浮囚の長安倍一族を挑発してついに戦端を開かせるにいたった乱である。

当然、頼義には充分な勝算があったはずである。しかし、追い詰められて死物狂いになった安倍一族の抵抗は、案に相違して激しいものであった。窮鼠がかえって猫に掴みかかってきたのである。

開戦劈頭（へきとう）に衣川関を安倍軍に占領されたのが、痛手であった。源軍の基地であった東国諸国との連絡が、断たれてしまったのである。兵糧と軍勢の補給が、困難になった。

それでも、やがて安倍一族の棟梁頼時を、辛うじて討取ることができた。しかし、その子貞任は、弟宗任ら一族の結束を固めて四千余騎、なおも執拗に抵抗を策していた。

これに対する頼義麾下の源軍は総勢で三千余騎、攻撃側のほうが寡勢で、しかも地の利もなく、人馬ともに疲弊していた。

天喜五年（一〇五七）十一月の黄海における源軍の敗北は大きかった。『今昔物語集』、『陸奥話記』などによると、頼義自身までが安倍軍に包囲されたが、長男八幡太郎義家とその麾下の七騎がとって返して防戦している隙に、辛うじて身をもって危地を脱したほどだったという。

村岡忠通の子為通の名は、そのときの義家麾下の七騎のなかにはない。しかし、為通の弟の修理少進景通は、そのうちの一騎であった。のち、景

通の子孫が大庭、梶原、保野、長尾などの鎌倉党の諸氏になり、鎌倉の西方の大庭御厨（藤沢市）を中心に威を張るようになるのは、このときの戦功を行賞されたものと思われる。

兄の村岡為通は義家麾下の七騎には挙げられなかったが、彼が頼義・義家父子の麾下にあったことは疑いない。後年に成立したものであるが、『満昌寺縁起』に、つぎのような記述がある。

後冷泉院の御宇の康平年中、將軍伊予守源頼義、詔を奉じて安部貞任（倍）を征するの時、為通、頼義公に属して軍忠あり。故に恩賞として相州三浦を領す。

また、「満昌寺ヨリ差上候御系図」にも、ほぼ同様の記述が見られる。

康平六年（一〇六三）癸卯年、奥州の軍功により三浦郡を賜はり、長門守に任ず。衣笠に城して三浦氏と号す。

さらに、『系図纂要』平朝臣姓三浦流の為通の項にも、

三浦平大夫、長門守、従五下、康平六年、頼義より相模国三浦郷を充行い、衣笠山に城を築き、これに居し、初めて三浦氏を称す。

とあり、『寛政重修諸家譜』平氏良文流三浦の為通の項に、

為通がとき、はじめて三浦を称す。平大夫、長門守、鎮守府將軍忠通が長男。

康平六年、先に伊予守頼義陸奥国の兇徒征伐のとき軍功あるにより、相模国三浦郷を宛行はれ、城を衣笠山に築く。このときはじめて三浦を称す。永保三年（一〇八三）三月十四日死す。法名円覚。三浦郷矢部村の青雲寺に墳墓あり。のち義継にいたるまでおなじ。

とある。

このほか、この種の異本類書は数多い。いずれも後代のものであり、為通が長門守に任じられたとすることなど、若干疑わしいことも記述されているが、前九年の役の軍功の賞として宛行われたのが三浦郡あるいは三浦荘であり、為通の墳墓の地が青雲寺あるいは円通寺とするなど若干の相違はあるものの、基本的なところではすべてが一致している。

すなわち、三浦氏を称した初代は村岡氏の三代目の為通だったのである。

これら諸本の記述を総合すると、前九年の役がおわった翌年の康平六年、為通が相模三浦郡を頼義から与えられて、衣笠城を築いて居城とし、初めて三浦平大夫と称したのは、ほぼ間違いのない事実であったと見てよいであろう。

なお、これより約二世紀ほどたった建長五年（一二五三）十月二十一日付「近衛家所領目録」に、摂関家近衛流藤原兼経の所領のひとつとして、

相模国三崎荘冷泉宮領内

というのが見られる。

三崎荘を三浦荘の異名と見るムキもあるが、事実は三浦半島南半（三浦市）の全域を占めていた荘園で、北半（横須賀市）に存在した三浦荘と

は別のものである。

冷泉宮というのは、小一條院敦明親王と左大臣藤原顕光の娘延子との間に生まれた冷泉院宮^{かんし}保子のことである。

その所領である冷泉院宮領の諸荘園は、関白藤原師実の室麗子の手を経て、その孫関白藤原忠実^{あきら}に伝領されて摂関家領になった。鎌倉中期の摂関近衛兼経は、忠実の五代目の末である。

平安時代に冷泉院宮領として成立した相模三崎荘が、鎌倉時代の中頃に近衛兼経を本所に仰いでいたのも、同様の順序で伝領されたからであろう。

冷泉院宮保子の父小一條院敦明親王は、三條天皇の第一皇子として生まれたものの、生まれにふさわしくない薄幸の生涯をおえた皇子であった。

第一皇子だったので、一時は次代の天皇たるべく皇太子に立てられたこともあった。しかし、ときの摂政藤原道長と関係を持たなかったことで、とごと道長の圧迫を受けて、ついにみずから皇太子の地位を辞さざるを得なくなったのである。

これで安堵したのが道長である。敦明親王が政敵になる心配が消えると、寛仁元年（一〇一七）、先皇に准じて院号の宣下を認め、小一條院と称することを許したのである。同時に、封戸、年官、年爵などのほか、勅旨田も設定して親王に給した。これが冷泉院宮領の母胎になったのである。

そして、この皇位を断念した小一條院敦明親王に仕えて、その判官代になっていたのが源頼義である。その父頼信も、敦明親王の娘冷泉院宮に仕えて、これまた判官代であったと『尊卑分脈』は伝えている。ともに、薄幸の父娘に対する同情心があったものと思われるが、それだけではなかったであろう。

小一條院・冷泉院宮父娘の所領である冷泉院宮領の莊園は、畿内にもあったが、東国にも多い。相模国では、三崎荘のほかには波多野莊（秦野市）もそれである。頼信・頼義父子が小一條院・冷泉院宮父娘に仕えたのは、東国武士の棟梁という地位から、東国所在の冷泉院宮領の差配を委ねられようとしたからではなかっただろうか。

後述するように、少なくとも相模波多野莊には源家との関係があったことが認められる。このことから推測すると、同じく冷泉院宮領であった相模三崎荘にも、頼義の手が及んでいたものと思われる。

前九年の役の行賞として、頼義が相模三浦郡を為通に与えたというのも、このような背景があったものと推測される。

より具体的に云うと、為通は源頼義の口入を得て冷泉院宮領相模三崎荘の莊司に任じられたのではないだろうか。ちなみに、十二世紀初頭における三崎荘の貢租は、毎年十二月二十八日の冷泉院宮の忌日にさいして、布四段を撰閑家に納めることだったと「執政所抄」に記されている。このときには、すでに三崎荘は撰閑家領になっていたのである。

しかし、源家を通じて為通が得たものは、三浦半島の三崎荘だけではなかった。ややのちに三浦荘として史上に現われる北半の地にも、彼の権限と勢力は及んでいたものと思われる。北半の地に存在する衣笠山を居城にしたという伝承は、このことを裏付けるものである。

なお、為通の孫義継は、天養二年（一一四五）より以前に「三浦荘司」を称していた。「天養記」所収の古文書に、明白に記されている。

このように三浦半島全域を支配下に置いた為通が、三浦平大夫と名乗ったのは当然である。以降、下人所従はもちろん一族郎党をも駆使して、半島内の地の開発に努力したであろうことは想像に難くない。

ちなみに、三浦半島の付け根部分の西北方に鎌倉が隣接しており、その

鎌倉が源家の所領になっていたことは、先述した通りである。また、さらに鎌倉に西隣する地域、のちに大庭御厨になる所が、為通の弟景通に与えられたらしいことも先述した。

つまり、東国における源家の本拠であった鎌倉の地を、それぞれ三浦党と鎌倉党の祖になる為通・景通兄弟の所領が、東南と西の両方向から囲んでいたのである。

このことは、三浦党と鎌倉党とが、源家にとって一郎等であるということにとどまらない存在だったことを示している。この時期には、為通・景通兄弟の対立は起こってはいない。対立が生ずるのは、それぞれの子孫が三浦党・鎌倉党を称するようになってから以降のことである。

箭執不動

三浦平太郎為繼

かろうじて前九年の役に勝ったものの、源家は陸奥に覇権を樹立することはできなかった。陸奥浮囚の長の安倍一族を粉砕するために、出羽浮囚の長の清原氏の援けを得なければならなかったからである。戦後の康平六年（一〇六三）清原武則は鎮守府將軍に任じられて、奥羽両国に威を張ることになった。

頼義の跡を嗣いだ八幡太郎義家は、当然、父が果たせなかった野望をも、同時に受け嗣いだ。永保三年（一〇八三）、陸奥守兼鎮守府將軍に任じられた義家は、やがて清原氏一族の内訌に乗じて乱を起こした。後三年の役である。

三浦平大夫為通の嫡男平太郎為繼は、当然、義家の麾下にあった。為通の弟景通の子の鎌倉権五郎景正も、ともに軍中にあった。双互に甥同士にあ

たる二人は、ともに義家の側近であった。このとき為継は三十六歳。景正は十六歳であった。

二人の名が天下に揚がったのは、金沢柵（横手市金沢）攻撃のときであった。

城内に楯籠った清原家衡は、城壁の上一面に楯を掻き並べ、その背後に弓の名手多数を控えさせていた。これに対した義家は、麾下の兵を一斉に突撃させて、城門を打ち砕くという戦法に出た。

源家の先陣をきっていたのは、為継と景正だった。二騎の頭上には、雨のように矢が降り注いだ。これを切り伏せくしつ、二騎は城門に向かって走った。

このとき、城門が内側から開いた。鳥海弥三郎ら家衡方の猛者たちが突出したのである。一瞬、景正の目が弥三郎に向けられた。まさにこの瞬間、城壁上から一本の矢が走った。景正の右眼を斜めに射抜いた矢は、兜の鉢付の右板に突き立った。

なみのものだったら、その場に倒れ伏したに違いない。しかし景正は、その矢を抜こうともせず、背の簾から矢を取り出すと、即座に当の敵を射落としたのである。

さすがに蹠跟となったが、それでも足を踏みしめて本陣に引き揚げたとき、やっと声が出た。

「我れ、手負いたり」

景正の身を気付かった為継も、本陣に取って返してきた。景正が倒れたのを見ると、すぐに景正の額に片足をのせて、矢を引き抜こうとした。その途端、倒れていた景正は矢庭に太刀を抜いて、下から為継を突こうとしたのである。

あわてて跳びすさった為継は、

「こはいかに、矢をば抜かんとするに、などかくはするぞ」

と怒鳴った。これに対して、景正も負けずに下から怒鳴り返した。

「弓箭にあたりて死するは、士の望むところ也。なれど、いかでか生きながら、足にて面を踏まることやあらじ。しかし。汝を敵として、我れ、ここにて死なん」

これには、為継をはじめ、なみいる源家の猛兵たちも、舌を捲いた。やがて、景正の右眼に突き立っていた矢は、為継が膝をかがめて顔を抑えて、ようやくにして抜き取ったという。

それから約三百年後の南北朝内乱の頃、打ち続く戦乱の東国で、戦場における応急処置の医療が確立した。軍陣外科である。同時に、『奥州後三年記』に記されていたこの挿話が、東国武士たちに想起された。こうして、鎌倉権五郎景正は、軍陣外科の祖と仰がれることになる。

なお、景正の子孫には、鎌倉初期の梶原景時などを経て、末期には名医と謳われた梶原性全が現われる。景正が軍陣外科の祖とされることになったのも、このことと関係があったかもしれない。いずれにしても、鎌倉極楽寺坂に面する権五郎神社（御霊神社）の祭神は、日本で始まった唯一の医学である軍陣外科の祖としての景正が祀られている。

ところで、景正には矢があたったのに、同様に先陣をきっていた三浦平太郎為継には矢はあたらなかった。それには、特別なわけがあったのだと説くのが、「大善寺縁起」である。

平常から、為継は金峯神不動尊を尊崇して、祈禱を欠かさなかった。だから、合戦ともなると、不動尊が金甲華胄の姿で現われ、為継に向かって飛ぶ矢を、いちいちに手で把んで庇護していたというのである。

現在、衣笠城址のある衣笠山の中腹に、小さな不動堂が残っている。本尊は箭執不動、あるいは箭除明王とされているが、これこそ為継が祀った

ものであると伝えられている。大善寺は、この不動堂の別当寺であった。現在、大聖殿と呼ばれているのがそれだという。

もちろん、これは伝説である。しかし、まったくの虚伝でもないらしい。昭和三十年代、この地の調査が行われたとき、大聖殿の詰の間近くの地中から、経塚に関係したと思われる石が発見されたのである。

また、箭執不動を祀ったという不動堂も、その所在地が問題である。衣笠山の中腹に位置して、若干の凹地状を呈しており、地形的に見ても、湧水池だったものと思われるのである。つまりは、衣笠城の水ノ手の所在地が、この不動堂だったものと思われるのである。水ノ手などの重要拠点に神仏を祀ることは、古代中世にはありふれたことであった。為継が衣笠城の水ノ手の守護神として不動尊をこの地に勧請したことが、のちに箭執不動の伝説を生じさせたものと見ることができる。

なお、前述したように、この為継より以前の代々については諸系図が一定せず、不確かなことが多い。つまりは、三浦氏にとっての神話時代だったのである。

ところが、為継より以降については、すべての系図が一定している。為継の代にいたって、ようやく三浦氏は歴史時代を迎えたのである。

その意味で、後代の三浦一族はこの為継をもって氏族の初代と見做したらしい。『吾妻鏡』の建保元年（一二二三）五月二日条に、「**義祖三浦平太郎為継**」とあるのは、このことである。

三浦党の勢力拡大

三浦莊司義継

後三年の役の辛勝は、源家になにもたらさなかった。陸奥への勢力伸

張は、失敗したのである。滅亡した清原氏の地位には、藤原清衡がとってかわった。いわゆる奥州平泉の藤原氏三代の栄華が始まるのである。

八幡太郎義家が後三年の役を戦っていたとき、中央では歴史の潮流が大きく転回していた。天皇の母方の実家である藤原氏が摂政・関白として政務の実権を握る摂関政治がおわって、天皇の父ないし祖父が実権を掌握する院政が成立したのである。

この頃まで源家が中央において勢力を有してこられたのは、摂関政治を布いていた藤原氏の爪牙の任を果たしてきたからである。これに対して、摂関政治と対立する院政を開始した白河法皇は、西国に基盤を持つ桓武平氏を積極的に登用した。

中央における源家の勢威は地に墜ちた。このとき、源家に不祥事が相次いで起こり、源氏の凋落を促進した。

八幡太郎義家の次男義親が西国で乱を起こし、三男義国が常陸国で叔父新羅三郎義光の党類と私戦を演じ、ついに義家に義親・義国二人の追討が令されたのである。このとき、義家が死んだので、父が子を討つ悲劇は免れた。しかし、かわって義親を追討した平氏の勢威が上がった。

源家の凋落をさらに促進したのは、義家の死の直後に起こった源家の内紛であった。

義家の跡を嗣いで源家の惣領になったのは、四男義忠だった。長男義宗が早世しており、次男義親と三男義国が勅勘の身だったからである。その義忠が、天仁二年（一一〇九）二月、暗殺されたのである。犯人と誤解された叔父賀茂次郎義綱は追討を受け、一族をあげて滅び去った。しかし、真の犯人は、その弟新羅三郎義光だったのである。事実の露顕するのを怖れた義光は東国に下り、甲斐武田氏、常陸佐竹氏の祖になった。

いずれにしても、相次ぐ源家の不祥事と内紛は、中央における源家の勢

威を失墜させた。源家の惣領になった為義は、必死に勢力の挽回に努めた。康治二年（一一四三）六月、おりから勢力を伸張させつつあった内大臣藤原頼長に臣従したのも、その努力の一つであった。しかし、その甲斐はなかった。実は、相次ぐ源家の不祥事と内紛の蔭に、対立する藤原摂関家の勢力を削ぐという白河院政の黒い手が動いていたからである。

中央における源家の勢力失墜は、その基盤であった東国にも影響を与えた。しかし、東国において源氏惣領家の勢威が凋落したのは、ほかに原因があった。新羅三郎義光が甲斐に武田氏、常陸に佐竹氏を起こし、義家の三男義国の長男義重が上野に新田氏を、次男義康が足利氏を起こしたのは、東国全域における惣領家の勢力を割き取るかたちで行われたものであった。当然、甲斐、常陸、上野、下野四ヵ国における惣領家の勢威は失われた。そして、このことは他の坂東諸国にも影響を与えた。東国における惣領家の勢威は、ますます低下して行ったのである。

このとき、決然と立ったのが、為義の嫡男義朝である。京都における為義の勢力回復への努力に相呼応するかたちで、東国での勢力回復に乗り出したのである。保安四年（一一二三）の生まれだったから、ようやく成人に達したばかりの康治年間（一一四三―四四）の頃だったらしい。

当然、義朝の行動を支えるものが必要だった。終始かわらぬ忠誠を源家に捧げる三浦党が、それであった。棟梁は平太郎為継の子三浦莊司義継である。

この前後の頃、義朝のある所、つねに三浦党の姿があった。そして、義朝の勢力回復の努力がなされたあとには、必ず三浦党の勢力も扶植されていた。見方をかえると、義朝の勢力回復は、そのまま三浦党の勢力拡大でもあったのである。

だいたい、義朝が育ったのは、三浦半島北端の沼浜（逗子市沼間）であ

った。半世紀ほど後の建仁二年（一二〇二）二月頃、義朝の旧宅は、まだ沼浜にあったと、『吾妻鏡』に記されている。

また、若き日の義朝が「上総御曹司」と呼ばれていたと、「天養記」に記されている。義朝の所領は上総にもあったのである。そして、上総の豪族上総介広常の弟頼次は、三浦義継の孫娘と結婚して、三浦莊金田郷（三浦市南下浦町金田）に移り住み、金田小太夫と称することになる。

江戸湾を越えた房総半島東南の安房丸御厨（千葉県安房郡丸山町）は、前九年の役の直後に頼義が朝恩として拝領したものである。久寿元年（一一五四）、義朝は正式に父為義から伝領するが、それより以前においても、為義が在京していたのだから、事実上、丸御厨は義朝の支配下にあつたに違いない。そして、丸御厨に西南方で隣接する安房郡の西岸一帯は、三浦義継の弟安西三郎の所領になっていた。

このように、義朝と三浦党の所領は、それぞれ隣接していたのであるが、この地縁関係は血縁関係でさらに補強されていた。

成人した義朝が、三浦義継の孫娘を妻にしたのである。やがて永治元年（一一四一）、長男義平が生まれた。のち、「鎌倉悪源太義平」と呼ばれるから、長ずると鎌倉に住んだものと思われる。

いずれにしても、決然立って勢力回復に乗り出した頃、義朝は腹心の三浦党と共に三浦半島の全域と房総半島の南半とを勢力下に有していたのである。このことは、事実上、江戸湾を制圧していたことを示す。この時期の東海道は、鎌倉から小坪の海岸沿いに逗子に抜け、衣笠山の北麓を東方に折れ、観音崎で乗船して江戸湾を横断し、安房、上総、下総と房総半島を北上するものだったのである。

ちなみに、三浦半島東岸の観音崎の走水神社は、江戸湾を東航しようとするものが、海上の安全を祈願したものと伝えられている。

江戸湾を制圧していた義朝が、最初に目を向けたのは、房総半島北部の下総であった。康治二年、下総相馬郡（千葉県藤代町、取手町、我孫子町等）の領主千葉一族の内紛に介入し、やがて同地を伊勢神宮に寄進、相馬御厨として立荘するや、正式に下司に任じられて、この地の領有権を握ったのである。

所領を押領された千葉氏は、一度は訴訟に踏み切った。しかし、義朝は鮮やかだった。若き日の千葉介常胤は、やがて保元の乱には義朝麾下の一将として戦ったばかりではない。義朝の子の頼朝が源家再興の大旗を翻えたとき、まさきにその麾下に馳せ参じてきたのである。

千葉氏の内紛に介入していた頃、義朝の目はすでに西相模の方面にも向けられていた。波多野荘（秦野市）、中村荘（中井町、小田原市中村原）である。まずは血縁政策であった。波多野荘の領主波多野義通の妹が義朝の次男朝長を生んだのは、天養元年（一一四四）だったという。（なお、『尊卑分脈』には朝長の母は修理大夫藤原範兼の娘、あるいは大膳大夫藤原則兼の娘だったと記されている。しかし、朝長が生まれた頃、義朝はまだ上洛していないから、これは間違いだと思われる。）

波多野義通の四代の祖経範は、頼義に従って前九年の役を戦った勇士である。その子孫と血縁関係を結ぶことによって、かつての主従関係が甦ったのである。波多野家で生まれ育った朝長の館は、のち頼朝が挙兵した治承四年（一一八〇）十月頃まで、波多野荘松田郷（松田町）に残っていたと『吾妻鏡』は伝えている。

なお、義朝を妹婿に迎えた波多野義通が、保元の乱にさいして、義朝の腹心の郎党として活躍したことは、『保元物語』に詳しい。

源家と波多野氏との間に血縁関係を通じて主従関係が復活すると、続いて三浦氏と波多野氏との間にも血縁関係が結ばれた。三浦義継の娘が波多

野義通の弟大友四郎経家に嫁いたのである。経家は大友荘（小田原市大友）の領主であった。

血縁政策は、中村荘の中村氏に対しても実施された。三浦義継の四男義実が中村荘司宗平の娘と結婚し、近くの岡崎郷（平塚市岡崎）に岡崎城を構えて、岡崎四郎義実と称したのである。

やがて保元元年（一一五六）、義実と宗平の娘との間に余一義忠が生まれると、これは佐奈田余一義忠と名乗ることになる。のち、石橋山の合戦で頼朝の馬前で戦死するのは、この義忠である。佐奈田余一と名乗ったのは、佐奈田郷（平塚市真田）を領有したからである。

ちなみに、西湘の中村氏は、波多野氏と同じく大族であった。祖系を辿れば、三浦氏と同じ平良文の末であるから、ほとんど三浦氏と同族と云ってもよい。その後、中村一族が三浦氏と行動を共にすることが多いのも、当然だったといえる。

中村宗平の長男重平は父の跡を嗣いで中村荘司となったが、次男土肥次郎実平は土肥郷（湯河原町土肥）の領主であり、三男土屋三郎宗遠は土屋郷（平塚市土屋）の領主、四男二宮四郎友平は二宮荘（二宮町）の領主、五男堺五郎頼平は堺郷（中井町堺）の領主だったのである。

こうして西湘の二大族と結んだ義朝と三浦義継は、さらに西湘の地におのが勢力を扶植して行く。松田郷が義朝の次男朝長を通じて源家領になったのは、その一例である。

とくに顕著だったのは、西湘における三浦氏領の拡大であった。岡崎郷が岡崎義実の所領になり、その子佐奈田義忠の所領が佐奈田郷だったことは先述したが、そのほかにも三浦氏の所領が西湘に成立していたのである。

やや下って鎌倉時代の中期、西湘の田村郷（平塚市田村）が三浦氏惣領

家の所領であったと『吾妻鏡』に見えている。この地は平安末期には石清水八幡宮を荘園領主に仰ぐ旧国府別宮の国府八幡宮領であった。このことから、三浦義継の代において、すでにこの地の在地領主権が三浦氏の手に帰っていたものと推測される。

また、義継の三男芦名三郎為清の子に石田太郎為綱というものがあつた。名の示すように、相模石田荘（伊勢原市石田）の領主だったものと思われる。のち源平合戦の頃、木曾義仲を討ち取った石田次郎為久は、この為綱の甥である。

このように三浦氏が江戸湾の周辺から西湘の地にいたるまで一族を繁衍させていたということは、本拠の三浦郡の支配が順調だったことを示している。事実、さきに半島南半の地が三崎荘になっていたことは先述したが、続けて北半の地も義継に三浦荘として立荘されたのである。

荘園領主が誰であったかなどは、まったく判らない。しかし、三浦義継が三浦荘司に任じられて、現地の領有支配にあたっていたことは確実である。

三浦荘の中心は、矢部郷の衣笠城であつた。ここに義継は、嫡男の義明とともに居を構えていたのである。

ちなみに三浦義継の次男津久井次郎義行は、三浦荘と三崎荘の境界近くの津久井郷に居を占めていた。三浦半島の東南方の沿岸部である。

三男芦名三郎為清は、三浦荘内西岸部の芦名郷に館を設けていた。その子が、先述した石田為綱である。四男岡崎四郎義実が西湘の岡崎郷に進出していたことは、すでに先述してある。

こうして、三浦半島を根拠地とした三浦一族は、右翼の房総半島と江戸湾の制海権、左翼の西湘地域と相模灘の制海権とを、源家の惣領義朝との主従関係を挺子として、ほとんど手中に収めるにいたっていたのである。

「相模三浦一族」の成立は、ほぼ目前にあったわけである。

（本学非常勤講師）

